環海異聞

十四

862
1

51

ガラス使用

862-1
(51)

環海異聞巻之十四

長崎着岸より上陸以前迄之記

九月六日　巳九ツ時長崎伊王嶋へ船を
繋く

長崎之湊ハ此所なりといふ事船中之役人ハ知りし漂流子なりとも始て之事なれハ海の浅深之程を考へ猶豫して船を廻し居る内段ニ本船

帝國圖書館

明治二一・一一・二一・購求

此分し半長崎にて見付しを見届役人并
人中思ひ小旗を建て異船に来り見届ては
趣あり船中にては長崎役所より見分に船
来りて取あへず漂流人を出し子細を申
させよと使節命せり我ても此是迄此海は日本
地といへる事ながら長崎なりといへるを何とも
と中事能と斗り思ひ居たりしに向ふより役
船来るといふによりして異邦の舟にや知元
なく尺結め語りし内通詞ゟ至付を見ましハ舟
の造り并に内に語りまし方く日本人なり姝
しさ限りなく寝ても憎きなれは使節の命
此まくまゝしとなしすまして待受ける前程
なく来船此際ゟて来りまし振子尋ましは
趣の取且云ひ且悲しみ約一ケ条にふりかゝりて
一言も申出すべき様なかりきかくて内々
子細申せと人々もいひ合たれ共図なし役

船へ乗り移り彼國語の通詞並に浦賀湊の
彼切手等を出し彼役人に見せ候処ハ其まゝにて
彼学の事を附けん定めて言葉を出し漂
流民共此度本舟渡来且[illegible]を護送
り来る次第よろしく申上候迄ハ彼國屋此上
此方ハ指図にまかせ碇を下ろし[illegible]の[illegible]
湊あり二丁比まて船をさし寄せて四丁乃碇を
下ろしつなぎとめおきたる

追々此所風難もおさまりけるよしにてある
形のことく和濤へひき入碇を下して云
此節オロシヤ人とハ別に彼学の事もれし番船を
打返し夜五ツ時比ニ至り彼検使両人（同安方行方覚左衛門）
（萬沢右平太とやらいふ人のよし）阿蘭陀人両人（一人ハ加比丹ドーフル一人ハ役人某）
大小通詞并属（同日七ツ時比出船本府比伊沢湊へ参るといふ）数船にのり来
ら来本船へ移りて彼是我々へ申にハ本國
まて帰りあたへらさし日本仕立比役を若[illegible]

出つしと指図ニ依て是を以着用ニ及出候へ
脱く此時ハ役人方委細ニ糺問ニ及處
使節（レサノツト）ハ椅子ニ腰を懸居阿蘭陀よ
加比丹ハ同間ニ入立なから居ける何か問答有
やう子之趣加比丹使節の服（フク）飾を見て甚
く恐れ入し体なりしきり大通詞石橋助左
衛門といふ人彼役人（ランゲツフ）と云者へ對話請事
分明ならさるよし之依阿蘭陀加比丹を見彼是ハ
位階もあらて卑き者なりと云同船すへきれ
なし用事済し上ハ引退らせ櫓へ上せ置られ
傍ニ此役人共指図せし様子ニて加比丹らを退
き櫓へ上り居ける故此（た）依て尋孫一通り済ね
て手前ハ退出せしか其後の事見聞せさる處
格前ニて先年渡し置し依紀文を返し
とは尋ね有りて是を指出すを取て大切ニ
箱ニ入れ錦襴の覆をかけ恭しく捧

申出之御趣きあり御打合もなく國王より
此書簡等を（寫）も差出せしや献上物の内
何か一品出せしと聞けり
帝王の書簡結構なる上覆の（きぬ）と
かる事箱入にて船中にありしを見し事
あり之（九）内の文言等此事ハ皆及されし
此節兵器并ニ焔硝等積しを御取上を
聞たりしハ此地にての御定法なりと

此事ハかねて聞及書き物にも有ると
見へ兵器より覚悟して差出せしと見え
右御札之事等済て御役人衆へ加比丹も御手厚
せられたり
附札（長崎へ来りロシヤ船差出の兵器御預り候品等之御預置）
九月六日
一天草見番所中嶋より飛船を以（未申之方）相
當り白帆相見へ候段御役所へ早飛脚

小瀬戸ニて右漂流を見出し出帆致し候ニ付

乗組中ニ相尋候處同人共申出候者外ニ

異國船漂来候心當ニ而御座候先達而別

段風説中ニ承り候エス國船（オロシヤとも）

可有御座候段申上早速御役所へ申上

御用人共心中上候上小瀬戸ゟ八里程の

御漂を見出し候ニ付沖へ被召連候段

被仰渡申中刻ゟ乗出し沖へ差越ニ酉ノ下

刻伊王嶋沖五丁程沖へ碇を入候之刻

一 御検使此方出役并かひたん乗船船頭

部屋へ御入被成頭ゟ之者ニ和ニ差置

右ニ役場ニ出張拍附添

船頭部屋入口足軽左右両人差置番仕候

鉄炮を持護衛ニ相守り差置候

一 御検使より御尋之次第

一 其方共ハ何國の者ニ候哉

御答 ヲロシヤ人ニ御座候

一何方渡来致し候哉

一ヲロシヤ国主（王）ゟ江戸府へ上（三）ル書簡并献
貢物并御勤来候品ニ而渡来仕候

一先年蝦夷地へ相渡候御信牌相渡有之
右ハ此節持渡り候哉

右相渡り則信牌差出し御検使へ可見せ

一オロシヤ国ゟ何比出船致候且何国へ立寄
候哉委細申上候様承知可申事

此儀先ニ書載有之事

一江戸府表并御奉行所へ差出候書翰検使
可相渡候事

此儀江戸府表へ持候書簡同前（差上）ニ相渡上可申候并
御所へ指出候書簡も真ニ持参仕候何れ他へ差遣無之候事

一信牌検使ゟ相渡候事

其又御役所へ真ニ持参仕候事

一御国法之事故武器玉薬今晩御預り候事

此儀異国船夜中玉薬御預り候儀何卒難相成
明日御申渡候此儀御免申上候事

一右之御尋中名之京船頭分之者斗ニ
礼を受し應對之様子も御見へ候

御請しや人分申上候

一拾二ヶ年以前同所ニ日本船漂流仕右乗
組之者共之内四人此度連渡九人之者最
御残り居候都合十六人漂流仕候

御尋

残り九人之者共ハ何方ニ残り居候哉

御答おろしや国ニ残り居候由承り候

御好ニ付書取之筆

一只今之繁栄湊方多く御見候方立風
波之荒ハ無心元候得共湊内ニ挽入
之節ニ候哉

其段容易ニハ難成趣ニ頼出候ハ
御尋有之所ハ可申上候

一昨日迄も御尋有之候而も不申上候事

一　右從進者ゟ御尋而下ヶ条ハ
右御孔乳　右御膳ハ上　漂流人四人之者共ゟ
出候ル之御答左ニ記

一　其方共何国之者ニ候哉
仙臺之者共ニ御座候

一　仙臺ハ何之中ニ有之者ニ候哉
御答左之通

寒風沢村
津太夫　六十一才

室ノ濱
儀兵衛　四十三才

同
左平　四十一才

寒風沢
太十郎　三十四才

一　何年何月何日仙臺出船致し候哉
寛政五年丑十一月七日出船仕候

一　おろしや国へハ何比致漂着候哉
丑十一月廿七日難船ニ而翌寅五月十日
ニ而おろしや国へ漂流仕候

右七日廿七日の日附漂流字ニ而違ひ
疑しく或ハ御写の誤りなるらん

一何を積荷仙臺ゟ出船致し候
仙臺江戸表へ御城米積荷出船仕候

一其方共ハおろしや人へ相頼此度乗組来候
おろしや国王ゟ其方共日本へ帰国
被致候ニ付此度使節帰国仕候ニ付
尤此節日本へ差送り候ニ付
両乗組来り申候

一船之名石数等ハ如何ニ候哉
名ハ若宮丸石数八百石二十六反帆ニ御座候

一乗組何人ニて来り候哉
都合十六人乗組三人ハおろしや国ニ而
病死仕残り九人ハおろしや国ニ残り居

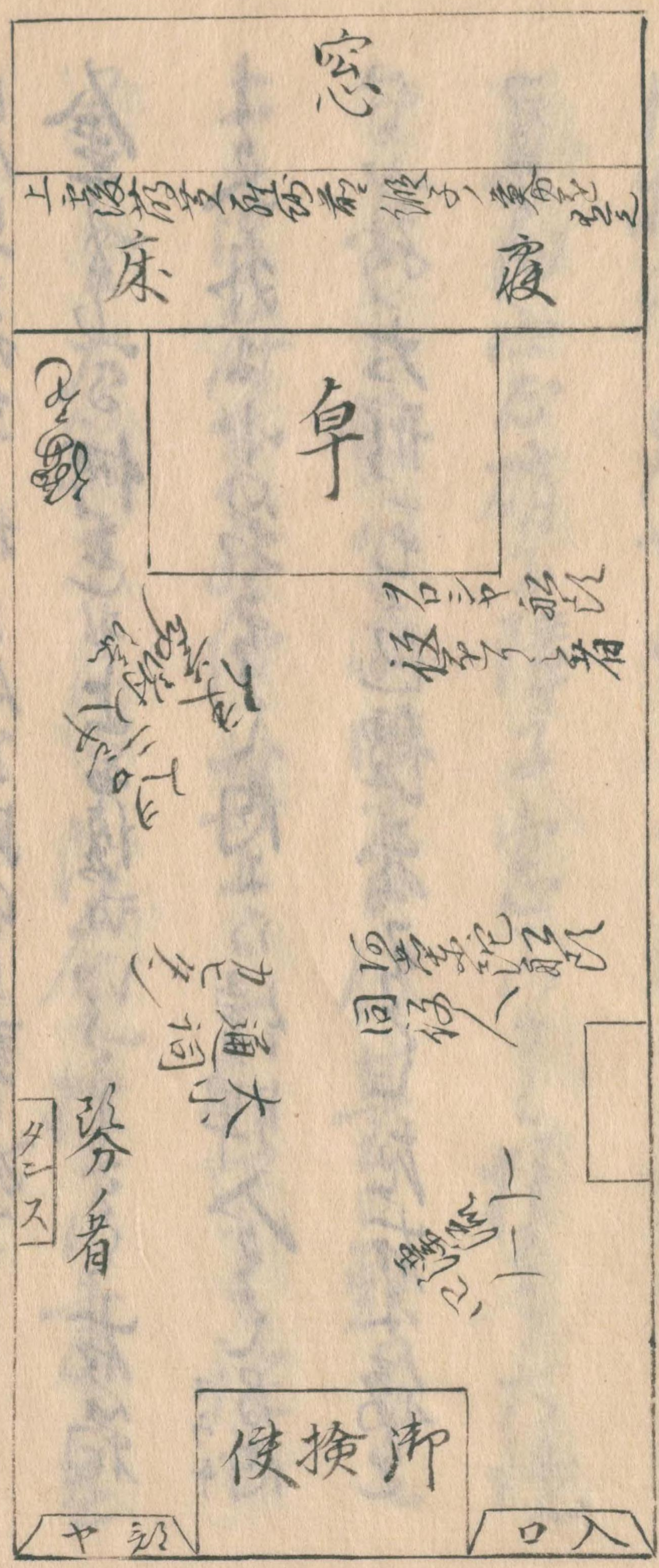
一九人ハ何故残り居申候哉
都て大国之儀ニ御座候得者おろしや出船罷在候
九人之者共居合ニ申右九人之内両人ハ極

老ニて手足も不叶ものニ見へ其上病身ニ候
候ニ付て此余ハ未残し申候
尤も漂流人共何迄もお頼しや人相見
候ハ白木綿鉢巻ニ振え袴しや
言葉よりし覚へ不居候様子此者ハ

一 此操使役之紀ハ彼是程七人程使候ハ
鉄炮を持候者ハ手合を捧事前ニ接ニ致
を持たる人大なる太鼓を背負ハ是何迄も
列を立て右並居太鼓を打出し合図と
して接兵の類を持候者何れも異形致し
頭を持上ケ七八ヶ囲在之人を出鉄炮打ち仕
形致し候六人も同様仕形をいたし候上ニ而
右之者船頭部屋階子より上り候迄ニ登る
同所へ此入此挨拶中上ル
船頭部屋傍り対合候処乞有之間
の様ニ床上ニ直　障子の様ニ切り付有之

此様候ふ訳也　但凡八九寸處程
真向窓硝子障子窓より中に掲る大鏡
左右二通前に中間四方の仮甚の額あり
上ル渡府貢所作　其上に三尺四方と認め
あり大箱あり内に江戸え持参は書翰並
和文　テロシヤ　海州語一通ツヽ此方ヨリ前去
書翰三通江府表へ指上げ書翰写を入置き
江戸へ持参書翰三通と云分也　子伝写の謂か以
此如き　持参へ江戸へ持参書翰の半分用通の半三

通りに謹書来る也一通ハ和文字謹一通ハ本國オロシヤ雑
西洋へ一通ハ満州譯を用ゆへく書れよし　右同様の寫し
も持来すと覚れ此方より前へ被申見せ（既ニ八）文體ニ此
漢文も先ハ此方より被申見たる故ニ事を見せ文章
三相且致し候ハせしハ何しの文にても此方（宜き）
此合点ある也相とんを用ゆへし事と如し
金をふる何通も上に渡すいたし右箱
之文外に小箱ありて内にハ信牌（マウチ）入置き尽内
ハふ封大形の色鐵あり左右之続き
あり



是ハ長崎通詞方より流布せる書記の手留と見ゆ 本編と併せ見て彼の様子を知るに足れり 故ニ此ニ並録す

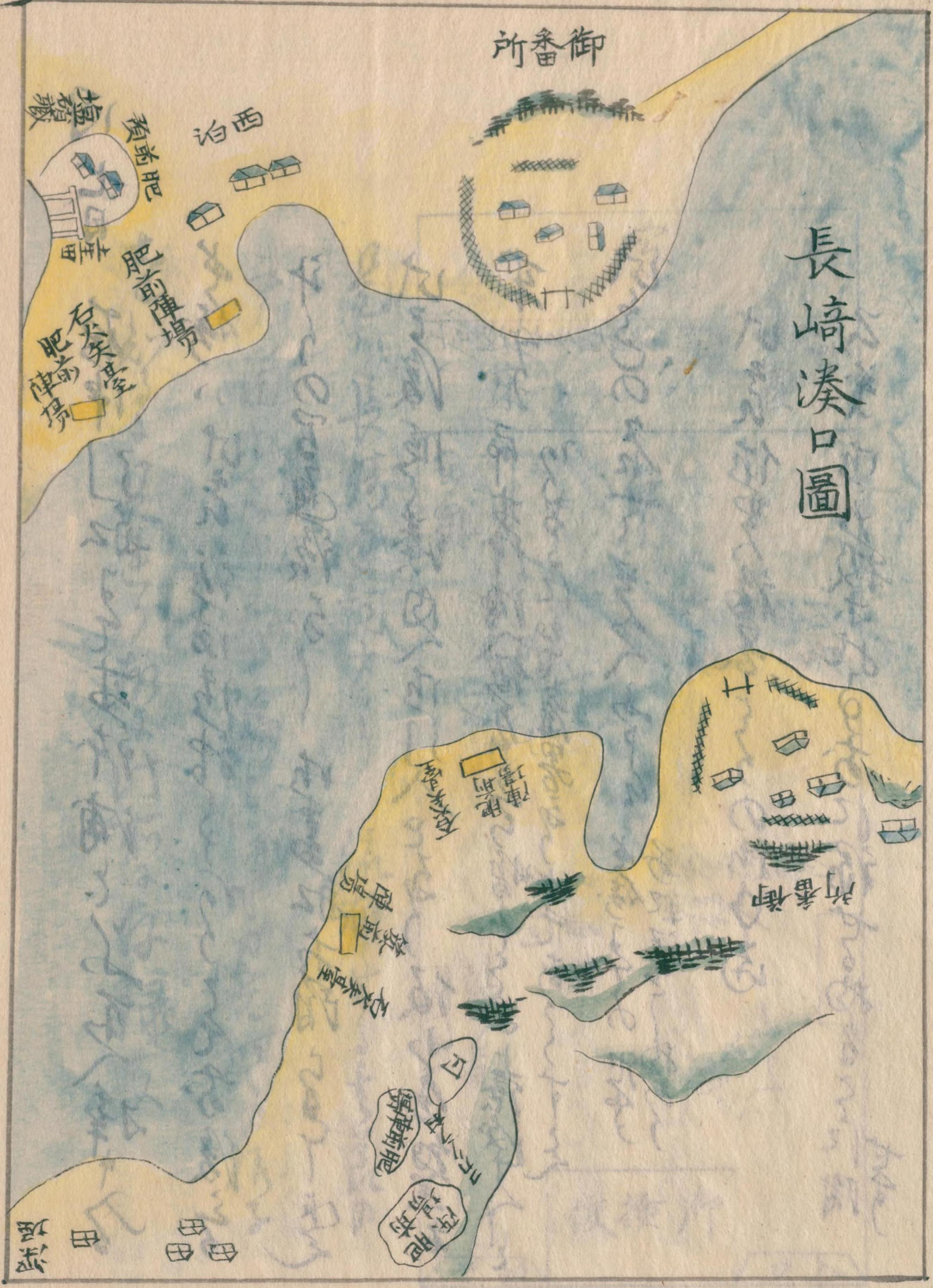
同七日 夜中引船にて木鉢浦といふ所へ挽キ入る 長崎ハ此比諸藩詰合ありとて警固方計りの営通路なし 此異船木鉢へまて来る 此度滞留之湊内へ引入となり 役小屋懸等来なり（即木鉢浦へ役屋建ち始むる上陸滞留すへしと何の為にや番所等ありとてあるまし）

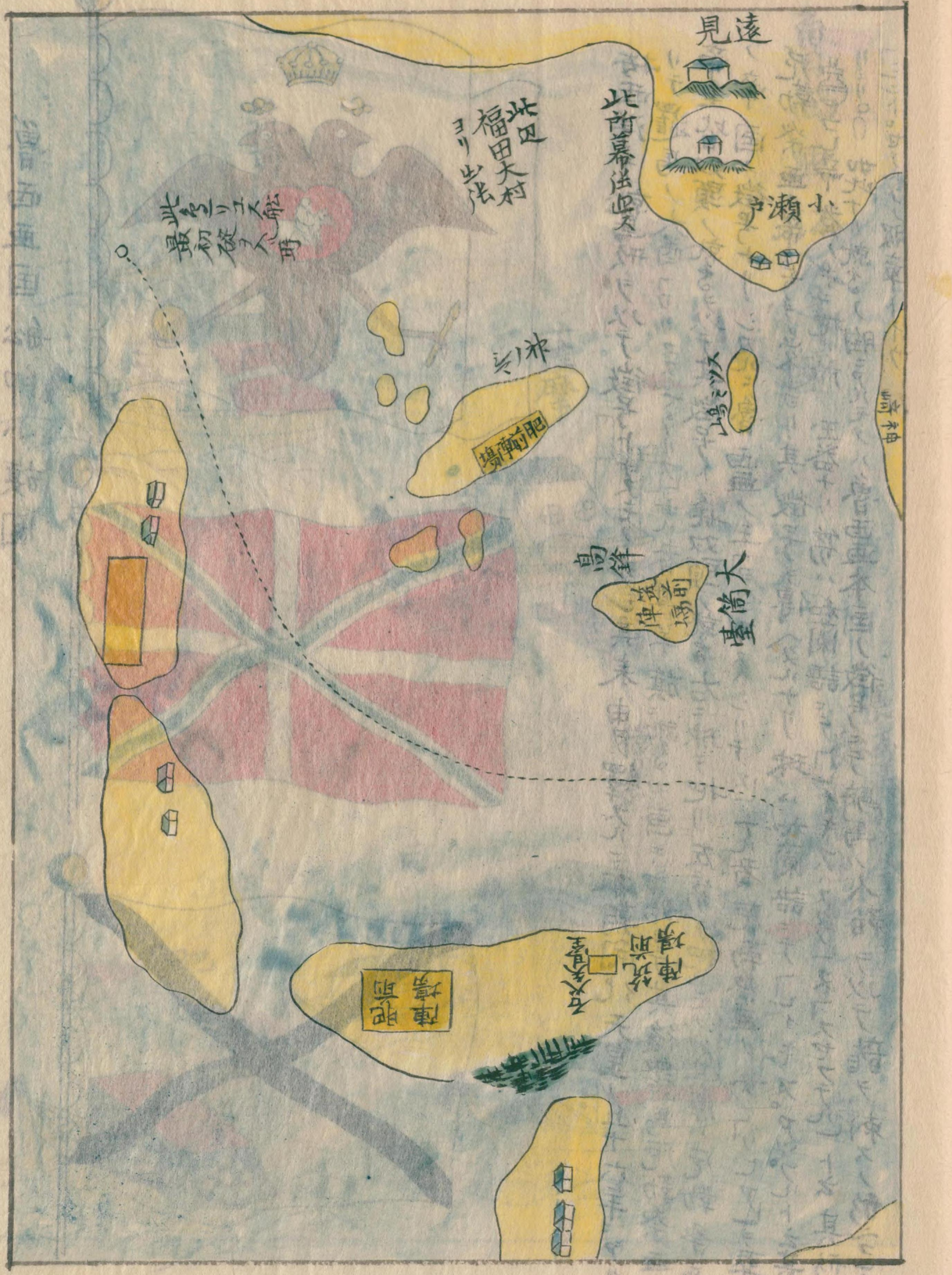
此異人名一に呂人ともいへ（長崎まての記事前に記しぬ物あり）

此度依田氏福島より寄の此中図 公義へ差出し被下れる書に録せる物なとこに附せす

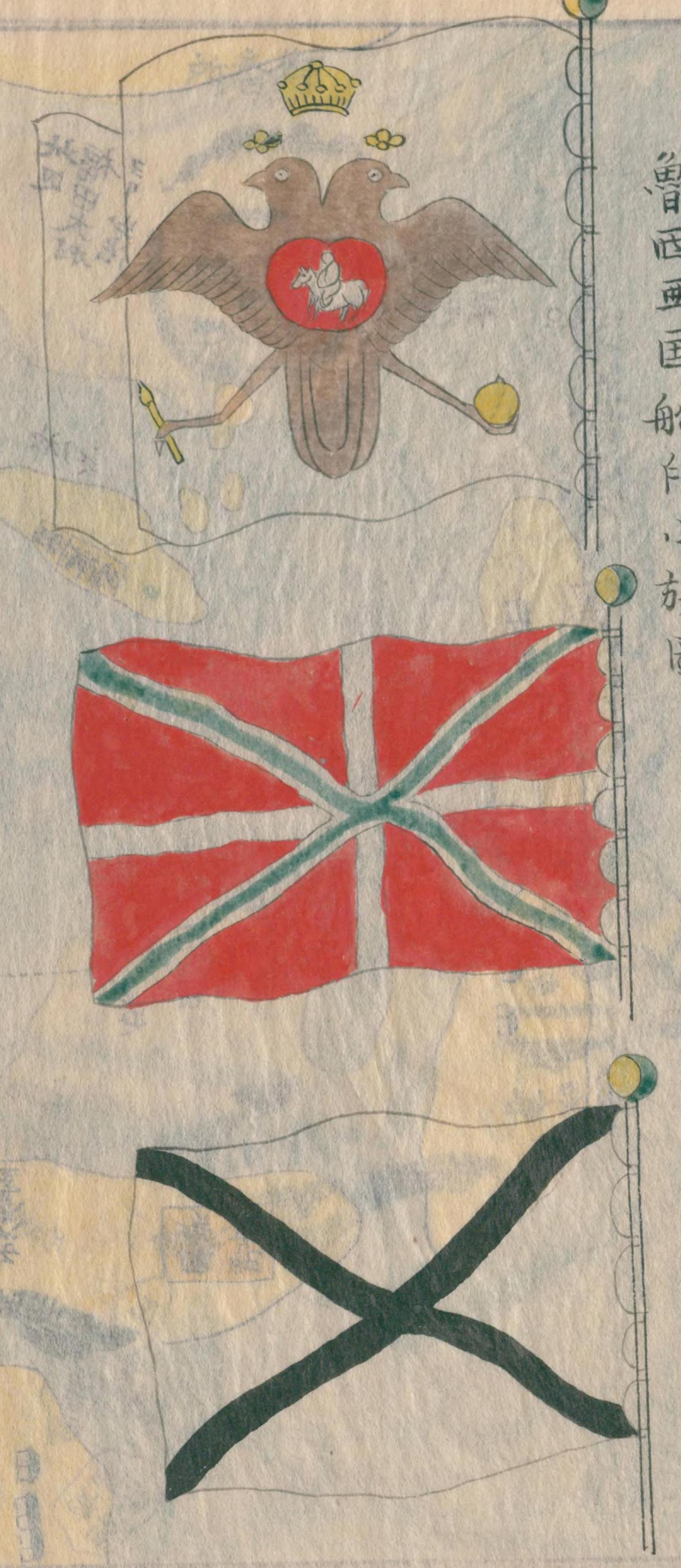
ガラス使用

長崎湊口圖


御番所
西泊
肥前番所
塩硝藏
肥前陣場
石火矢臺
肥前陣場
肥前陣場
石火矢臺
肥前陣場
御番所

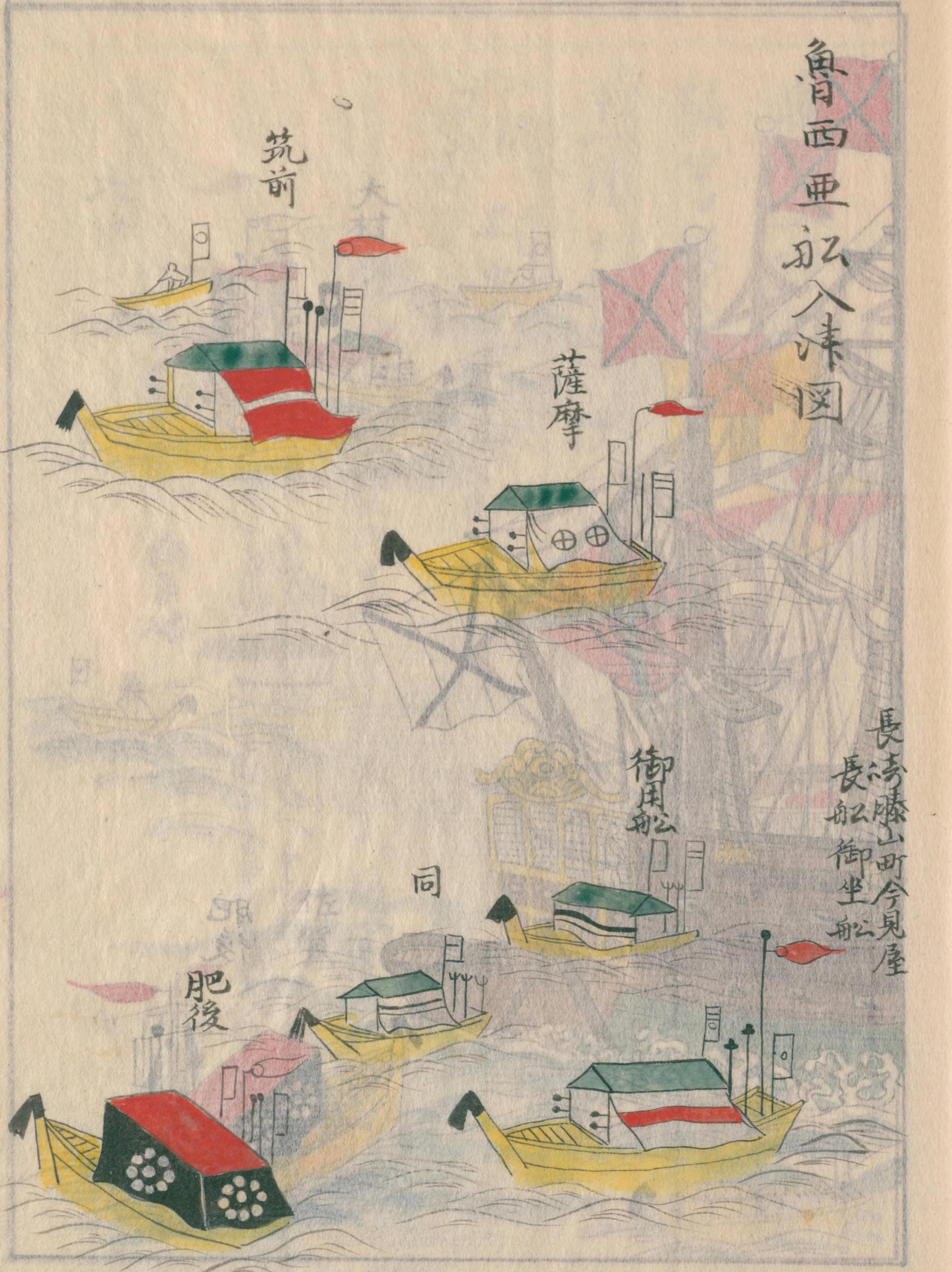

遠見
小瀬戸
此所幕張ス
此辺福田大村ヨリ出張
此處ヨリエス船最初碇ヲ入ル所
神ノ島
肥前陣場
大ミツ島
高鉾島
大鳥臺
肥前陣場
石火矢臺
肥前陣場

魯西亜国船印小旗圖



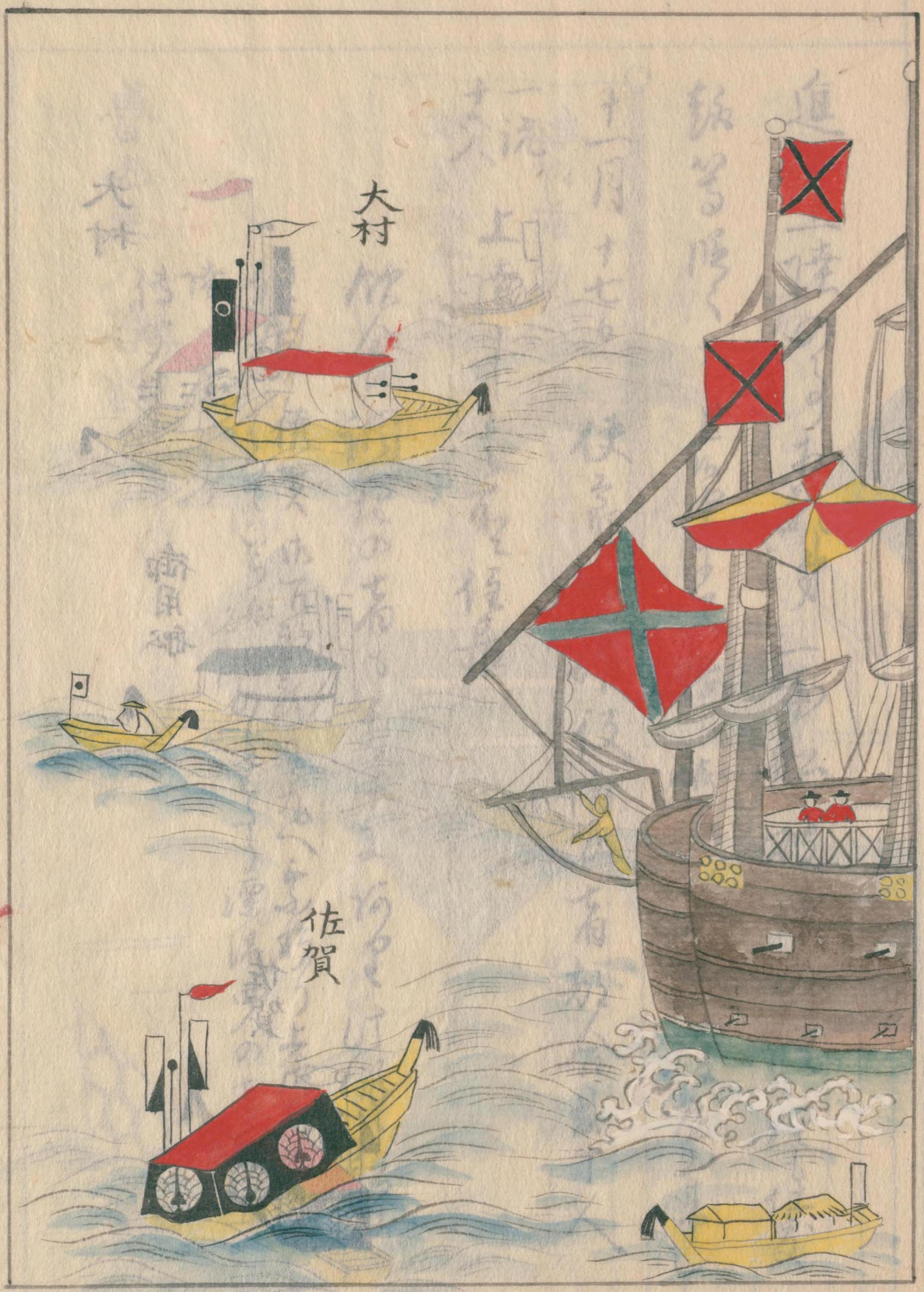
按西洋ニテ鷲形ヲ以テ徴号トナスモノ多シ其来由ヲ繹スルニ本朝開化天皇ノ五十六年ニアタリテ羅馬ノ大酋「カリコス。デウリス」ナル者其羊旗ニ鷲ヲ画キシニ始リテ其後羅馬厄勒祭亜ノ帝王皆双頭ノ鷲ヲ以テ其徴号トス此双頭ノ鷲ハ右ニ球ヲ把リ左ニ笏ヲ把ルモノハ其原ハ厄勒祭亜ノ帝国ノ徴号ナリシカルニ魯西亜ノ王「ヨハン子スバシリテス」ナル者厄勒祭亜ノ女「ソヒア」ヲ娶テ厄勒祭亜ノ帝号ヲ受シヨリ其徴号ヲ傳ヘタルナリ球ハ和蘭語ニテ「レイキス。アップル」ト云其形如⊖コレ帝者ノ手ニ把ル所ノ玉器ナリ笏ハ和蘭語ニテ「レイキス、スタヒ」又「スセフテル」ト云其形リニリ。〇如此ナリ鷲ノ胸ニアルモノハ魯西亜本国ノ徴号ニテ騎馬ノ人箭ヲ以テ龍ヲ刺スノ形ニテコレヲコンシント。セヲルケノ服章トイウ

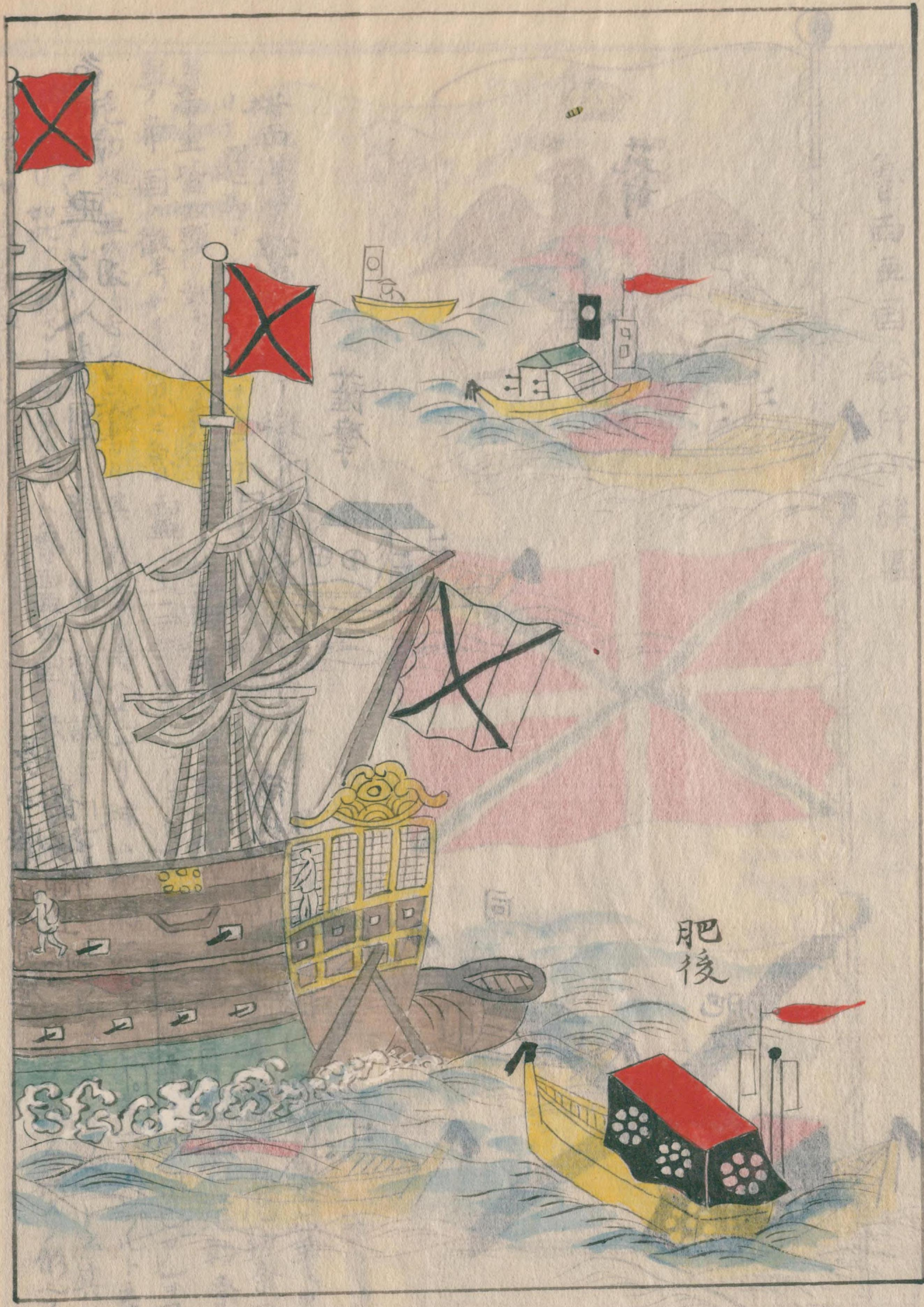
魯西亜舩入津図

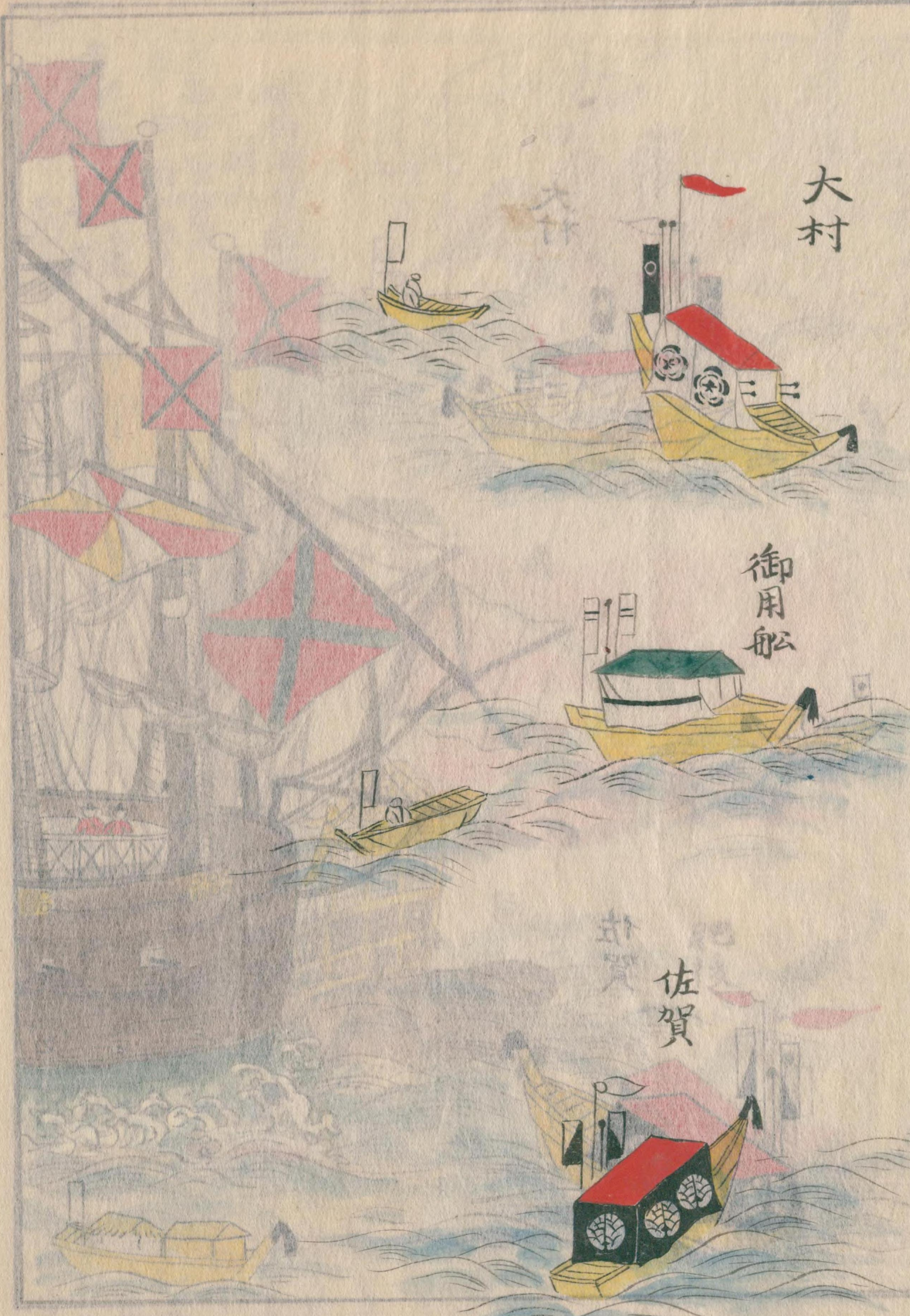


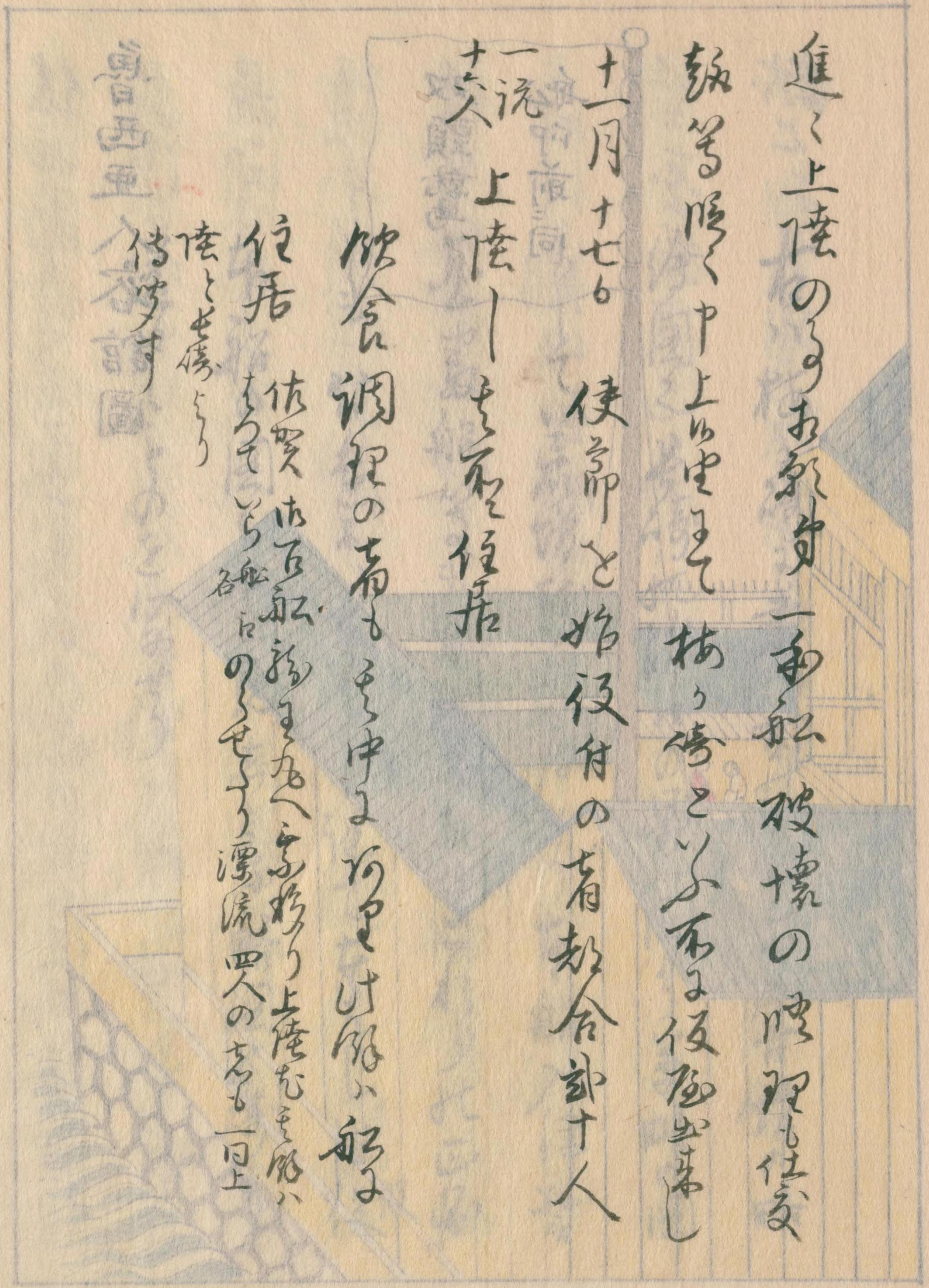
長崎勝山町今見屋

長舩御坐舩


大村
佐賀


肥後





進く上陸のゆるし無之一両船破壊の修理も仕度

類篤願く中上ル處まて梅ケ崎といふ所に役所出来し

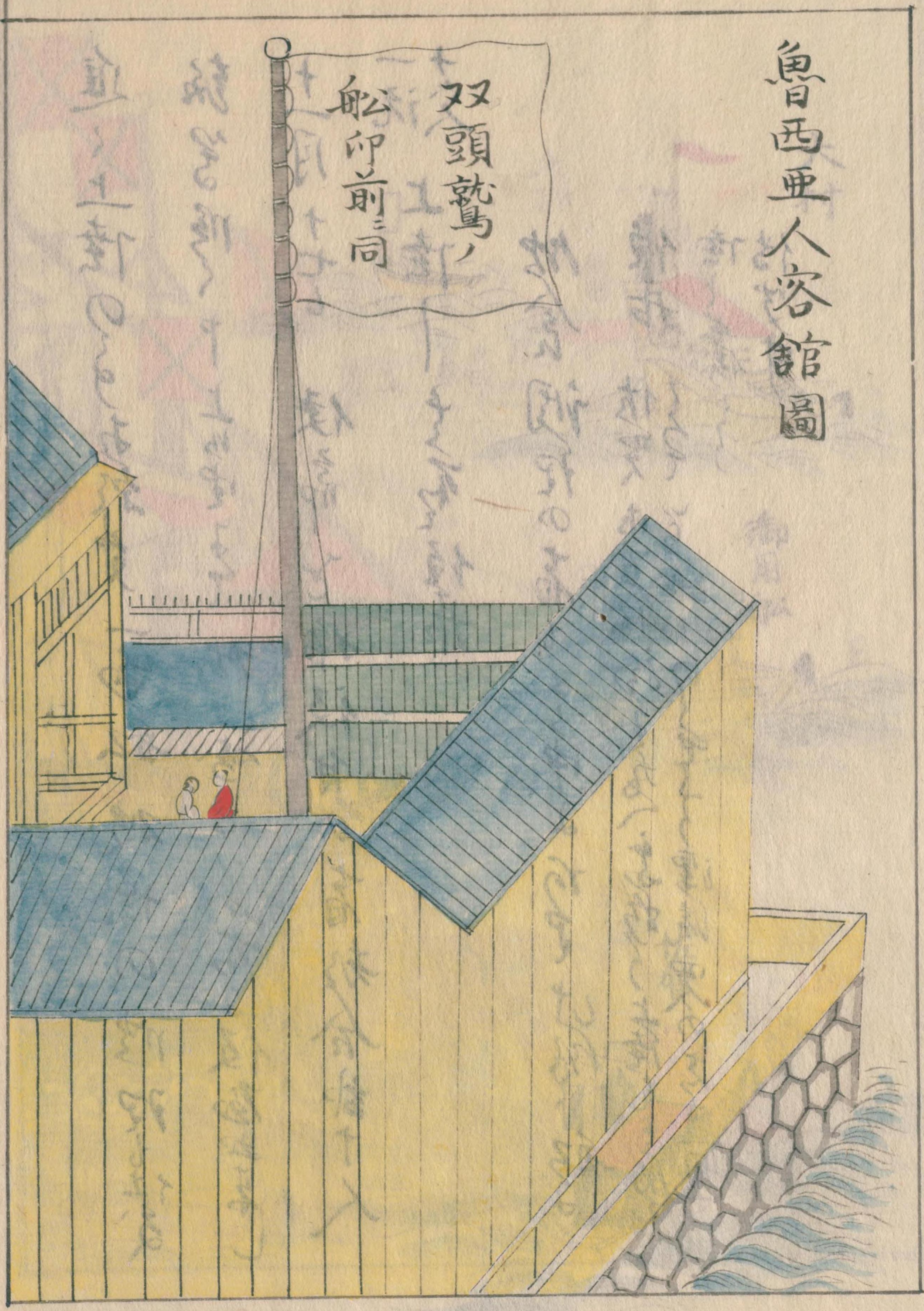
十一月十七日使節を始役付の者都合弐十人

（一流十六人）上陸し右所住居

飲食調理の者も其中ニ有之外ハ船ニ

住居（佐賀人佐賀船類ま九人乗組上陸も不成ハまるでいら各船ニのせ置漂流四人の者も一日上陸と出候より）待申す

魯西亜人客館圖



右ハ梅ヶ崎ニ建ル所ヲロシヤ客館の略
絵図也 長崎此湊口の景ハ図より草略の図
にして荒増残らせおり 唐船入津ノ節
並蘭船等も皆大略あり これら此正景
也 公邊ニハ委しく絵て奉りし彼役
唐船の図も其見さる略図長崎より
送りしものを写せり

ガラス使用

信牌を以る長崎の湊の前へ仮屋を補理
に御旅館を作りけるに實ハ新規ニ建て役人の
居間ハ日本の座敷なり六畳敷にて次の間も
同しく旅館にて作り居し所百姓やしきを仕切を
設け此者共を指置なる役所ハ番士數人にて警固
ニ時代に見ゆ亜国出入の門ニ番所あり門番を附て
警固嚴重也之
献上物ハ不残右明キ蔵へ入置

其中大鏡ハ横壱丈五尺長サ四間厚サ四
寸五分縁ハ金にて牡丹唐草花模様を
彫付たり裏ハ板を張り
右の物ゆへ御蔵へ入るに戸前を破り横にして
よふ〳〵納めたり船の損覆にて船中積荷砲綱
とも不残悉く入になし此運送にても種々心を尽し
船底にハ延縄を大石を積置なりこれ船足を重
くせんが為と云海上船の破壊せしハ船底ゆるめ

ガラス使用

得る此方迄の根子なりとて形を縮かと云
食料等日く渡遣り得るものハ何によらす
気入らす
彼人等何にても此方より渡せし品ハ深く重
なしとて甚感しける醤油ハ別て賞味せり味噌奈
良漬ハ用ひ馴さる物にや格別賞翫せられき
常當中古地の景色を生写にせしもの影画等
ある物の數を續く移し取りて写を遊ひあり乎

中日本婦人乃姿を写せしハ殊に其容能（よく）て
似せたり其器の比金箱隅より当る所へ高（タカミ）より
遠見志くらし物を此窓へ移して写せしとなり
按に其窓ハ和蘭にいふドンクルカームルといふ
ものなるへし
魚鳥等其外類此上迄館内へ入置て写
真せり或ハ器にとり或ハ鳥抔ハ丸むきにして
後肉へ別に物を納め眼を入代へ真に生物のことく
似り

ガラス使用

成せ置ところ其中雉鶏抔ハ殊ニ飛動の勢
ありしとそ
館内ニ居りし時ハ押葉抔取ニて一ツ圖をよう書き
乃名を聞自らこれを唱へ明けて凡て事々傍ニ記ス
別けたる事も見せ沙汰居くも名を出留む一所
一種も漏さす筆記したる内ニテシプウトと云醫師画き
出来細工も極めて巧なりき言葉抔も諸國ニ
辨ニ通し居る程ニて此人の画共もて多く筆

無せし趣なり
太十郎ハ生得陰氣偏屈の性なりしが帰船上陸
迄して後も何かの沙汰知れ手間取て永く沙汰無の
事もいつ明る事ならんと思ひ鬱滞せしや一日不圖
寝静て大取て使不及抱（小刀）を盗ミ出し口中へ
突立ク絶息しけり血影霰出殿ニ御命ハ定
ニ見へけり館内役人ニも大ニ騒動し早速
法訴へ出檢使も来り色々ニ治紀し所狂氣

甚遠なる兄弟もおかり右は両人外科一人（吉雄婿）
幸哥おゑらる（別に）（暑書）加寸古乃医師中日々見廻療
治あり舌も切て飲食言語も出来兼候の所脳を
ワ捲り三人の者昼夜看病しけるに右は性なき
故夜中に寝の間をなし我扱大にも心労す
早與ハ口中も愈へされとも飲食更に無れ
絶食三十日ほとなり死扱も甚々労悲之しかり
幸哥何ヶ工夫の嗽（ウ）薬（ガイ）をなしけるか右愈へて更

よりハ自由に要事になりたり此手段に彼国の
医師も我折りし程手之又其後ハ食事すゝめて
色々氣を付しきと志きりに勧しかれ共此間も
好むもの等務せしかハ大にめてたり又其後を
一向好む中きれ銀よりて何てそ人兄弟見角云ふに
て床に臥記のまゝ通して今日に至れり
板付氣毎日医師見廻館外に於る籠数置られ彼人
より の間まで駕籠の雛形を拵えるものハ時々館内に

外を以て地見て形を写せりと見ゆ二里迄とゝろ木
日本の舊にかしも遠けれは皆く行き迄へる地
長崎港湖の干潟も二氣を発て見し様子之
船中より上陸経ないりても誰者人空く日を
費す志なく或ハ測量算用或ハ書記或ハ画
図或ハ細工ニ努メて所を要しく督府も開居せん
子ノ年（文化元年甲子）二月廿日迄（廿九日寅刻）江戸表ゟ伺同付

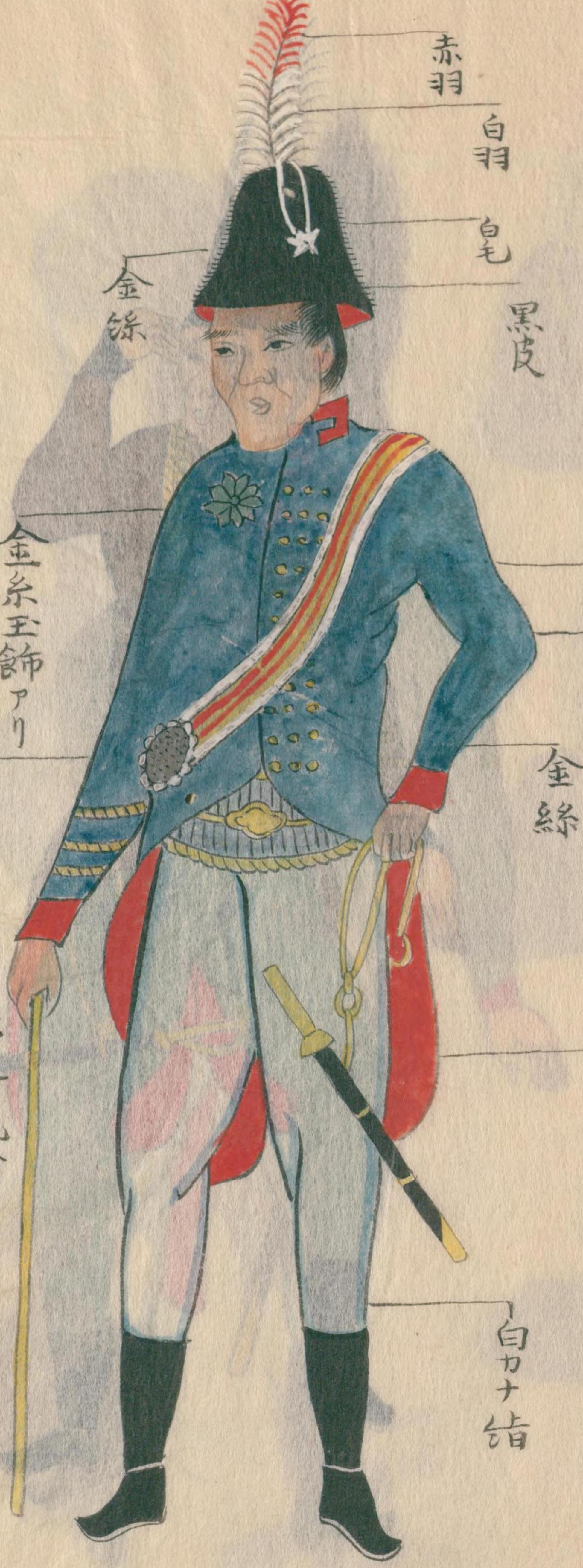
遠山金四郎発　長崎へ出立七日程迄く同三日朝（六日七日）
使節を立山御役所へ御呼出之
此日奉の事別に侍國の記に多しこゝにハ
漂客申せしまゝを録す
御役所へハ使節并にコヨルと云官人両人（二其足軽頭の分斗）
出外にカピタン（舟師名ハクルーセンステル　ル）ラヒリウ医師之足軽
一人外皆被者へ百迄梅ケ崎より波戸場へ切り
西屋敷前立山御役所へ行きし也

ガラス使用

其節通行の町々ハ左右ニ幕を張詰し也
都合三度ホと出しと覚ゆ

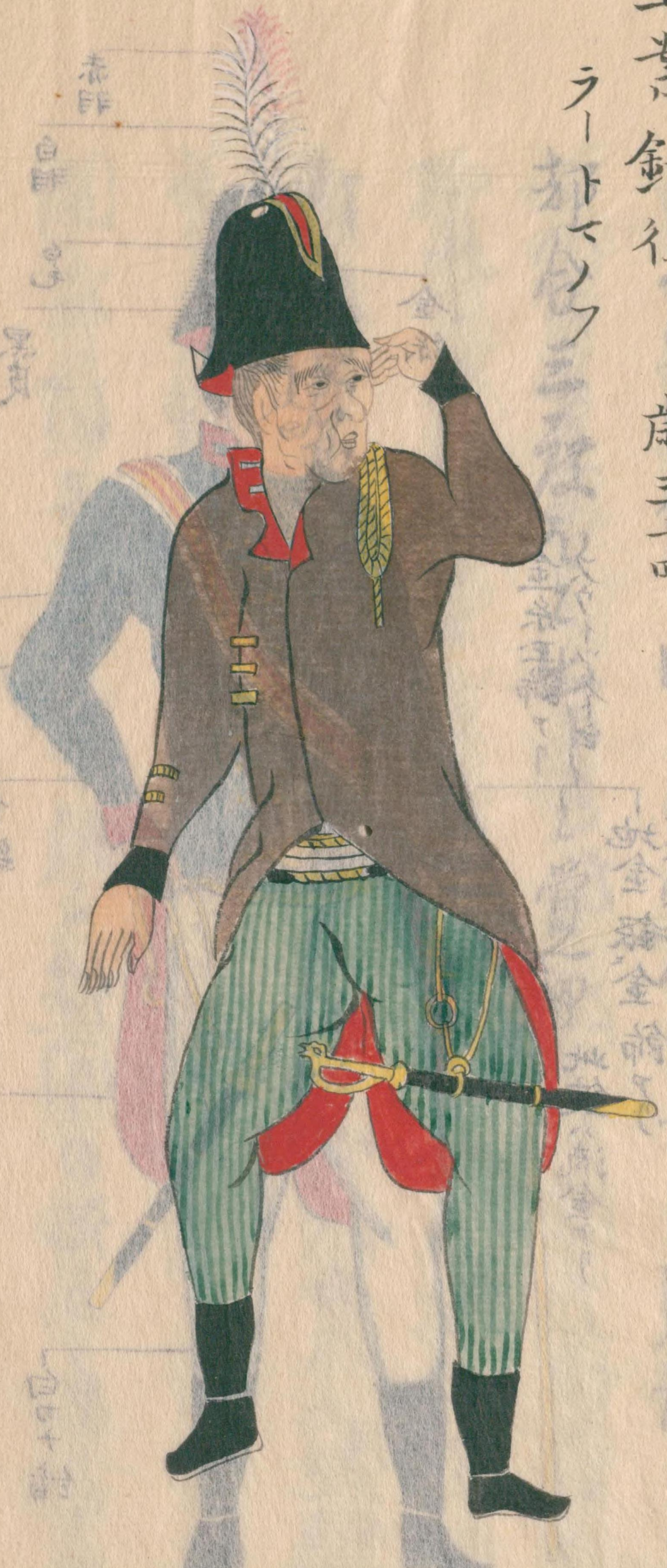
使節レサノツト等之像
并冠帽徐圖

ニコラ　レサノツト　歳四十一


赤羽
白羽
皂毛
黒皮
金絲
金糸織 レシタト云
衣服花色天鵞絨但衣服ハ着替ノ毎度地性色共ニ種々ナレ氏製作ハ同シヿ
金絲
裏猩々緋
白カナ皆
金絲
金糸王飾アリ ズウイツタト云
地金銀ニ金飾アリ 裏ハ淺黄ノキレナリ
此錠ハ流金ナリ

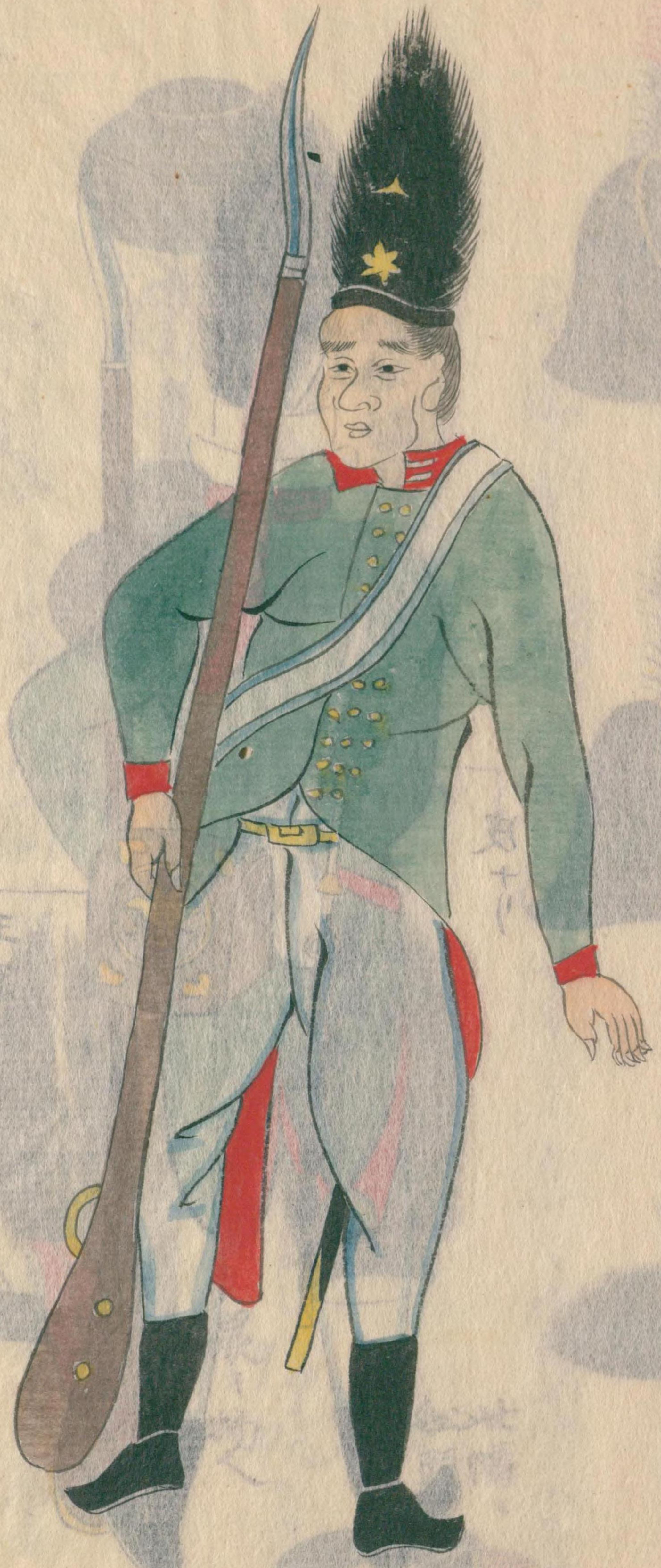
上業針役　歳三十四

ラートマノフ

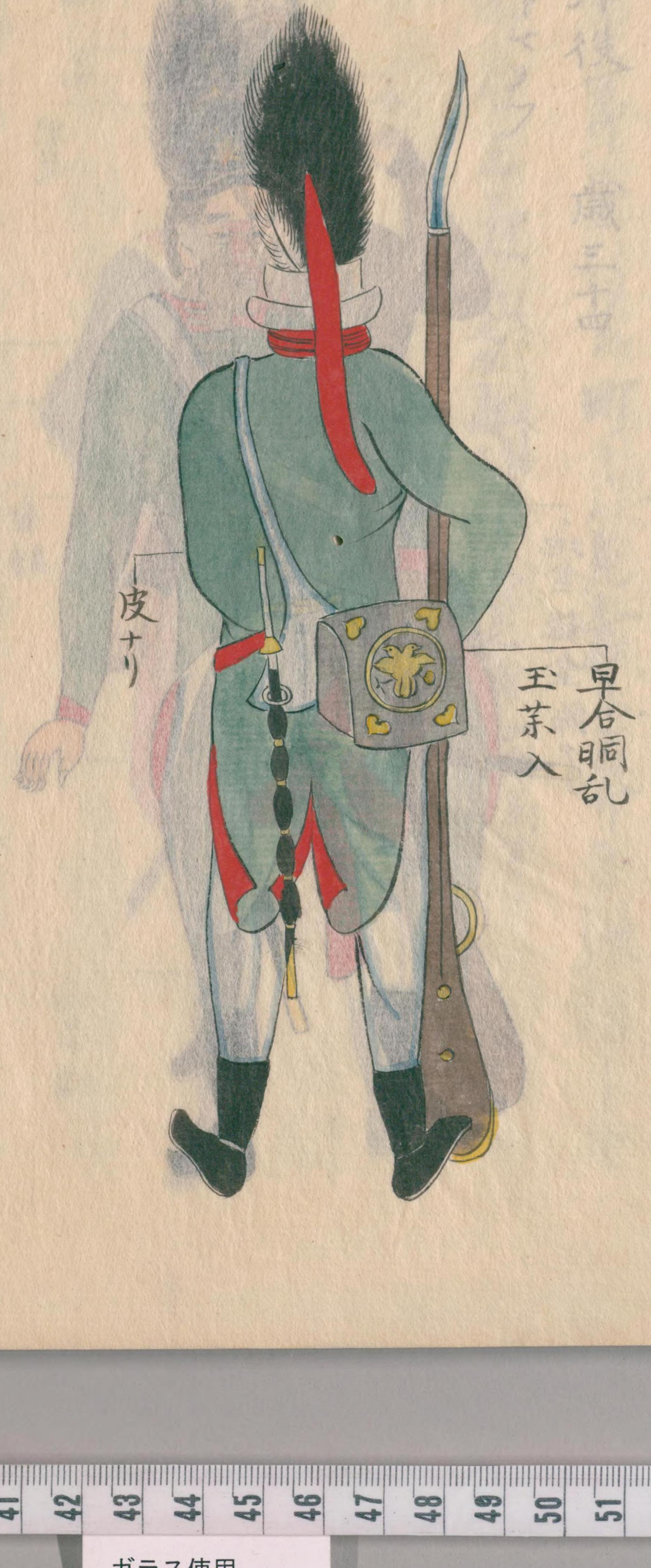


歩卒（サウダ）

アシカル



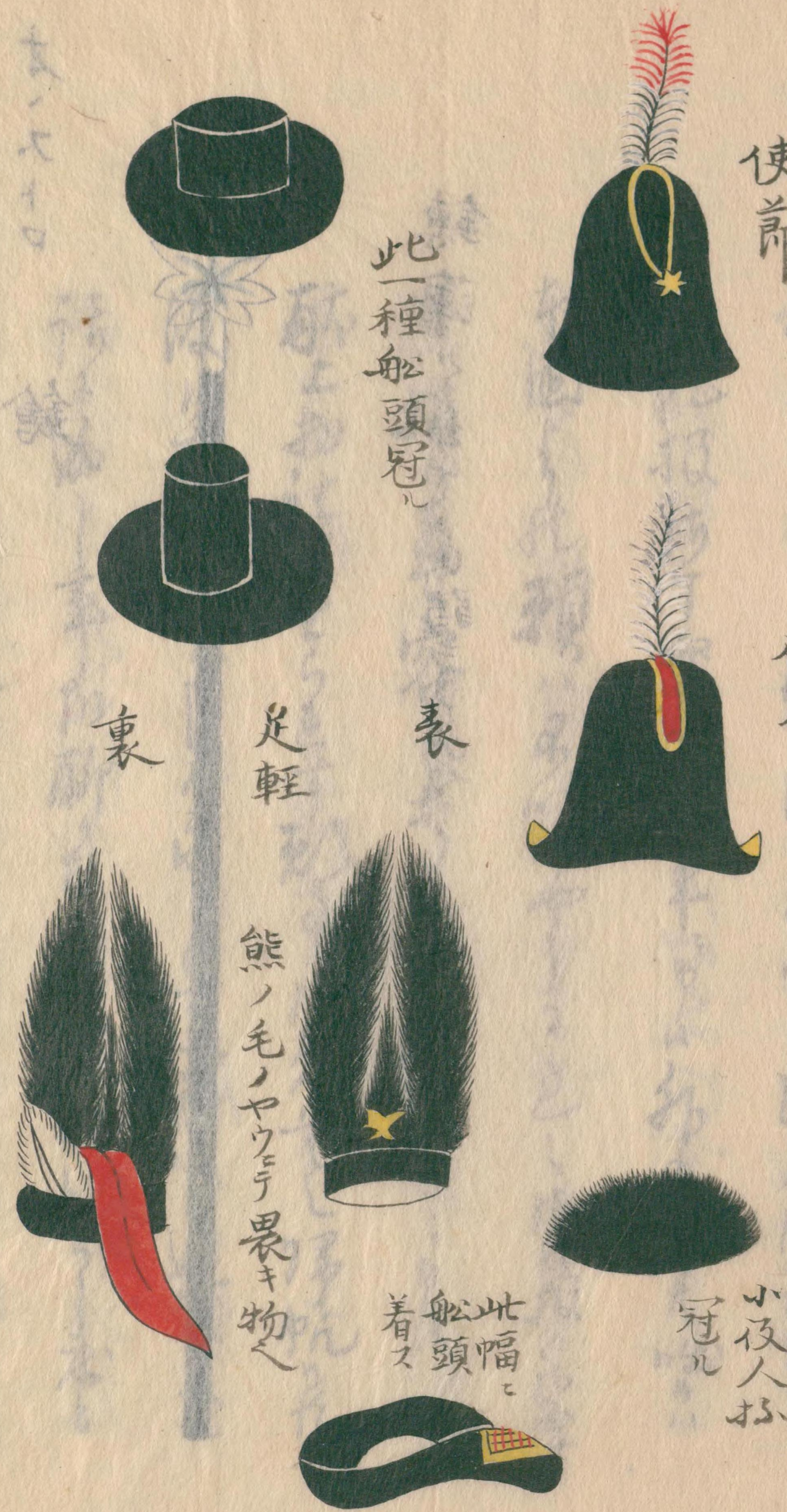
ガラス使用


皮ナリ
早合胴乱
玉薬入

足軽何連も對の衣服之濃萌黄羅紗なり其内大鞁と打ッ者ハ赤色ナリ

其外の足軽弐人て使節の部屋の図ニ鑿図ニお後ある

冠帽


使節
役人
此一種船頭冠ル
表
足軽
裏
熊ノ毛ノヤウヱテ畏キ物之
黒毛
小役人共冠ル
此帽ニ
船頭
着ス

オヽストロ

鎗

鏸薄く至て手弱きもの也

使者にも面会の時も此咄をしけれとも御当地にて
御取扱御丁寧なる事とも外の者共咄候ハ
本国にて此願ハ不叶やうな色々御取扱の御手厚
きハ招りまて容易に来りし處根なきものと申ハ
献上物請させられす殊ニ御免無之帰帆被仰
渡り事になりしか共此度の逗留中通詞共へ世
話になりし事故聊なから謝物いたしたしと
願ひしかとも何品の贈物もならぬとて断られ候ハ

ガラス使用

前々も御役所ニ而兎角の儀ニ付御座候
使節中よりハ各々何之志差ニ如き不届段
事なりとも相尋ね御免被成ともも御絶しハ
甚よし候かくれ拙ハ昔しかる酒し望之
為と云前々共参之候ハ最近年月御尊學
恩ニ而居り何も外ニ承り事無之厚キ思召ハ
受納致せしも同前御心文御無用ニ候也
然とも中ニ候へも然る上ハせめて羅紗の裁さし
なりとも出し候とて羅紗一束四人の者へ
指出しくるる右御座も中上より頂き申べし
となり前々ハ御国法も恐入ましく辞退
致せしうと御検使へ直ニ差出何も受用て
致させ御検分ありて貰受之
此ニ江戸出以後頼之上　御上へ指上ル
使節何れも大殊之外別段ニ候て中ニ候は
本願ニ而不時々舟之往来面会の事も

ガラス使用

是し殊ふ叶ひ帆の上ハとても汁世みてハ出生小事是へき根肌しよて自ら足よて地とふミ付ケ必ず地下よて速ふつしよて落涙きかりけり

出館前迄ハ携へ帰りて演村まて住居の前へ出し御検使御立合よて御改色形左の通り

一浦賀切手書付二枚　一奥州仙臺送状　二枚

一白寶丸綾紋布　壱
一木綿綿入　二
一單物　壱
一同繻半　壱
一同股引　三足
一同足袋　壱
一同風呂敷　壱
一單袴解裏　壱

一方針　壱
一同袷　同
一木綿半合羽　壱
一帯　二筋
一同脚半　壱足
一秩父單羽織　壱
一同解（ヒキトキ）裏　壱
一毛織小手當　壱

ガラス使用

一	授ゟく	壱
一	紙入	壱

四人之者於魯西亜国貰物等ゟく

一	金鎖	八十
一	日本仕立絹縮入	四ッ
一	同襦半	四
一	同帯	四筋
一	同并木綿枕	六
一	同合羽	四
一	矢立	壱本
一	銀袂時斗	四
一	同羽織	四
一	同股引	四
一	草蒲団	大小 七
一	更紗襦半	四
一	羅紗	壱反

右国王より進之貰ひ中には

一	金銭	六
一	銅銭	八
一	更紗巻物	四
一	同合羽	壱
一	絹単帯	三筋
一	木綿并麻襦半	廿九
一	同風呂敷	八
一	毛織袷	三
一	同股引	二足
一	銀鎖	大小 百九
一	衣類取入箱	四
一	同襦半	三
一	同股引	七足
一	同風呂敷	三
一	同股引	十足
一	麻蒲団	五
一	同単帯	壱筋
一	同合羽	四

ガラス使用

一めりやす并木綿帽子七
一革袋　三
一同沓　弐足
一手毛　二
一同袋　壱
一[illegible]ノきこ　三
一染木綿　二反
一梳　壱枚
一鋏　二挺
一錐　二本

一同股引并足袋　廿四足
一同帽子　三
一紙入　四
一毛皮（ハイホリ豹皮）　壱枚
一椰子水飲　二
一火打　三
一角木綿　二
一孫の手　七
一剃刀箱　壱
一錫罐　壱

一同鉋乳　壱本
一硝子瓶　壱
一烟管　三本
一鏡　二面
一横文字本　壱冊
一麻地油絵（国王夫婦像）

一硝子箸のおし　壱
一同玉　四
一針入　壱
一眼鏡　壱
一世界図并船絵　十枚

右ハ彼国逗留中稼溜金銀銅銭を以買調
又ハ知音より贈く（もらいカに）
漂客曰彼金銭ハガラレツケ和蘭チリンピ迄

といふ銭あり 手形中ニ獣の形ありて其左
識を持たる人の像あり裏面ニ横文字ニ
（形弁く家紋判より落く見せし　銀銭四百五十枚ニ而替す）ガラヒツケは
阿蘭陀あり 阿蘭陀銭あるハ日本ニて交
易ありしと云 凡そ價しすと云ゆ
オロシヤの金銭ハガラヒツケより大なり
銀銭四人前六百九十六 銅銭十四五枚金
銭四人ニ八十九枚持来

銀銭ハ形古十六通り皆持来西
帝王よりエカテリナ（当今祖母）迄ハ王ノ像を鑄
当今の父王より以来ハ文字ばかりあり
ホコリといふ字之と國号銅銭ハ年暦何
何年と云文字鑄付ありよし
右持参候品〻ハ追て於御役所御調の
段〻の書付より書抜くこれ補金出館
已後於立会御役所御改候品ハ別紙ニ（追て先之）

御留守居衆ゟ段ニ御奉行衆江差出候ヶ所書留し
抱候ともいふ事ハなかりしぬ
御所持の品金銀銅銭ハ悉く御役所
へ御取上右代り御割合を以銀子ニて被下候よし
外持居候品ハ先例ニ残御取上ケ進呈度御寫
御旨ゟ相渡置候御引渡ニ而品物相渡集
御覧有之も預て帰国せり

同月十日御役所ゟ四人共ニ館内ニ出ル人々別
惜を告て皆々再會期しへくもなきと泣き悲

しみ〳〵ゟ出立御役所ゟ御白洲へ召出一通り
御礼しも相済候後追々被申出（其ゟ出別ニ名）踏絵等被仰付
相済之御定法の通り揚屋へ被入
御免之折く出牢市中出まで御免扱
色々御丁寧難有御事共なりき
同月廿六日魯西亜船ハ帰帆の由我々ハ地路く
諸九人等御国命にし此儀傳聞し候
其へ付上ハ御国帰より々て御尤を以閑かくと侍

ガラス使用

862
1

善く寛よく不思義にして扣取奴船し如く帰朝せし事此嬉しさ限りなく十三ヶ年此年月を重祢故郷ニ語出せん事を楽ひつ後を侍りひくり

環海異聞巻之十四終

ガラス使用